



2025 年(令和 7 年)3 月 31 日発行

No. 20

公益社団法人 日本山岳会 山形支部

支部長 鈴木 理夫

事務局 〒997-0752

鶴岡市湯田川乙 35 河口 昭俊 方

メールアドレス : ymg@jac.or.jp

編集 : 日向 稔也

目 次

1	支部長あいさつ	No.11637	鈴木理夫	p 1
2	新会員紹介	No.17361	結城敏宏	p 3
3	今年度の活動報告			
	天元台を滑る会	No.16797	沼部貞治	p 4
	月山春スキー	No.15137	野堀嘉裕	p 5
	環境研修登山・庄内海岸アルプス	No.12340	佐藤映子	p 6
	山小舎探訪・万助小舎	No.16462	日向稔也	p 7
	東北・北海道地区集会	No.11637	鈴木理夫	p 9
	それぞれの白馬	No.11637	鈴木理夫	p10
	宮城支部との交流会	No.16798	沼部ひろみ	p12
	それぞれの上高地	No.15137	野堀嘉裕	p13
	支部晚餐会	No.17125	丹野浩之	p14
	樹氷原を滑る会	No.15525	河口昭俊	p15
	学校から見える山の取り組み	No.11637	鈴木理夫	p16
		No. 7734	木村喜代志	
	古道調査の取り組み	No.16462	日向稔也	p20
4	追悼文			
	今野秀穂	No. 9595	粕谷俊矩	p22
	田中洋子	No.12340	佐藤映子	p23
	大場貞吉	No.9173	會田茂雄	p24
5	特別寄稿			
	玉山登山の記録	No.15526	武田幹男	p25
	後藤幹次さんの思い出	No. 7734	木村喜代志	p33
6	山形支部活動記録			p36
7	支部会員の活動記録			p37



支部長あいさつ

会員番号 11637

鈴木理夫

2025年は日本山岳会設立120周年、山形支部創設75周年となる記念すべき年になります。日本山岳会は全国組織であり、今年は支部を超えた交流の機会をより増やすことが可能になると思います。1950年に設立された歴史ある山形支部は、日本山岳会全体や他の多くの支部と同様に会員数の減少と高齢化の課題を抱えています。75周年の節目となる今年が、将来への展望を見通せる年になることを切に願います。



今年度を振り返ってみますと、気候変動のもたらす影響の怖さを認識せざるを得ない場面が多々ありました。積雪の少なさから瞬く間に山の雪が溶けてしまい、「月山春スキー」で石跳沢を滑るのは危険なため、予定を変更せざるを得ませんでした。7月末の県北部の集中豪雨による、遊佐・酒田から戸沢・新庄に至るまで大きな被害をもたらしました。現在も幹線道路の国道47号は片側交互通行の状態が継続し、鳥海山の登山口に至る遊佐方面の道路は通行不能な箇所が、まだ多数存在します。初企画の「それぞれの白馬」では、大雪渓コースが安全に通れないため閉鎖されるという、夏の白馬では考えられない状況となってしまいました。昨年の少雪から一転し県南部は豪雪に襲われ、余りに積雪が多いため重みで断水が生じ、「天元台で滑る会」は中止せざるを得ませんでした。気候変動は地球全体の問題ですが、山形の山から見たその影響という視点で山形支部として何か取り組めることがないか、考えてみる必要があるのかもしれない。

少子高齢化の進行に関し、その押し寄せをひしひしと実感せざるを得ない状況にあります。今年で山形県の人口は100万人を割ることが確実です。既に山形県の人口は仙台市を下回り、これからも人口減少はひたひたと進んでいきます。以前は登山道の整備を地元の集落等で担ってきた面もあったのですが、現在では困難であり実際に誰が登山道を整備していくのかという問題があります。熊の出没も日常茶飯事となり、どこに現れてもおかしくなく、本来なら冬眠している冬期間まで出てきてしまうのが近年の現象です。

そのような状況の中で新入会員の確保は来年度も継続して最重要課題になります。周囲で興味・関心のありそうな方には是非加入をお勧めください。日本山岳会は全国に支部があり、山形支部も県内全域から会員が集まって組織されています。限られた地域の組織ではありませんから、地域の山岳会と両方に所属している会員も多く、それぞれのメリットを感じている面があると考えられます。広い地域から多様な人材が集まりい

ろいろな会員と知り合いになれることが、山形支部の魅力の一つではないでしょうか。

「学校から見える山」の活動は山形支部の活動の看板となる事業ですが、今年度奥羽山脈の展望図を南陽市の梨郷小学校を始めとする4つの小学校の子どもたち、高等学校体育連盟登山専門部の1・2年生山岳部員及び顧問の先生に展望図を配布することができました。その様子は毎日新聞、山形新聞、米沢のケーブルテレビNCVで取り上げていただきました。特に梨郷小学校で行われた木村顧問によるお話に対する、全校の子どもたちのいきいきとした反応が印象に残っています。

最後になりますが、昨年12月の本部晩餐会にて木村喜代志会員と小林政志会友が新しく永年会員となる表彰が行われました。改めてお祝いすると共に、日本山岳会の活動に対する半世紀に渡るご貢献を称え支部長のあいさついたします。



本部晩餐会で永年会員表彰を受ける木村喜代志会員（写真中央）
小林政志会友（写真左）

澄み切った青空に流れる雲と稜線を歩く喜び

会員番号 17361 結城敏宏

日本山岳会山形支部の皆様はじめまして。昨年 10 月に新しく入会させて頂きました米沢市在住の結城敏宏と申します。多くの方々との出会いと縁が繋がり、こうして会員の皆様と共に一緒に活動できますことを嬉しく思います。

加入後早々に湯舟沢温泉での支部晚餐会、そして蔵王温泉での樹氷原を滑る会にもお誘い頂き、少しずつ馴染んだ気ですが、未永くお付き合いを頂ければ幸いです。

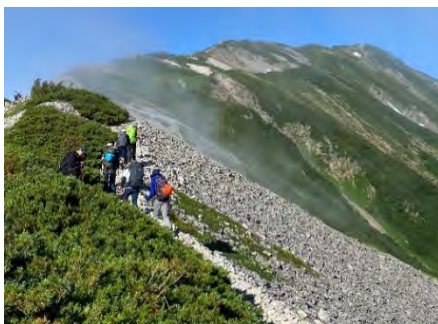
中学高校と大好きな陸上競技の楽しさに熱中していた頃は、真っ赤なトラックと緑のフィールドが好きでした。大学を卒業して郷里山形県に戻った後も、中学高校の大会審判、大会運営、選手強化等、陸上競技に長く関わり続けましたが、53 歳での早期退職を機に、果樹園のお手伝いから、カヌーキャンプや山歩きなど大自然の中で活動することが格段に増えました。



この 10 年程で、夏山から冬山、登山道の整備や遭難防止対策の活動にも参加する等、山に関わる日々が、益々増加の一途をたどる生活を送っております。

夏山では涼しい風と雲の流れを感じながらの稜線歩きが、冬山では澄んだ空気の中で、頭上に広がる青空と真っ白な雪を抱く稜線を眺めるのが、今では大好きになりました。一番のお気に入り、目下のところ白馬大池から雷鳥坂、小蓮華山、三国境に至る稜線歩きですが、憧れの剣岳や地元の飯豊朝日も未だに登頂を果たしておりません。

経験も技術もまだまだ未熟な自分ですので、会員の皆様方から様々なアドバイスを頂きながら、体力の続く限り、これからも新しい出会いと発見を求めて、山を楽しもうと思います。これからも未永くよろしくお願いいたします。



白馬大池から白馬岳をめざして



冬の蔵王刈田嶺神社

今年も快晴！『天元台を滑る会』

会員番号 16797 沼部 貞治

去年から3月の恒例行事となった西吾妻「第2回 天元台を滑る会」が行われた。参加者は粕谷顧問、野堀顧問、鈴木支部長、河口事務局長、武田幹男、加藤美智、沼部貞治、沼部ひろみの会員、会友の高橋毅・安井康夫、小林政志、酒井真澄、山田和人、米沢山の会の黒澤茂の計14名。

3/16(土)10:00 道の駅米沢に集合、各々車で白布湯本駅へ。

ロープウェイで標高1350m天元台に上がり、大笠山荘へ到着。

昼食後、見上げれば素晴らしい天気、明日には低気圧予報なので希望者7名で山へ上ることにしました。リフト終点でゲレンデ組と別れ、夏道沿いに稜線へ。天気が良く汗ばむ陽気、順調に高度を上げ梵天岩～天狗岩・吾妻神社に詣でる。青空とパノラマビュー、飯豊～磐梯山～蔵王～朝日と見事な景色だった。帰りは大斜面と狭い樹林帯を滑りゲレンデへ戻る。



山荘に戻り食事の準備。今回は会友の高橋毅さんから陸奥湾のホタテを大量に差入れをいただき網で焼いた。毅さんが来ればホタテは付き物で、山荘周りには謎の貝塚があるらしい。夕食はメインのホタテ焼き・米沢牛芋煮・天ぷら・煮物・冷たいつけ麺、など。今回も皆さんから土産の銘酒が並び懇親会は大いに盛り上がりました。

3/17(日)やはり予報は的中し強風。ロープウェイが運休なるという情報があり、朝食後急いで下山することにした。昨日、行動していて良かったとつくづく思った。

スキーで下山組は湯の平コース3キロを滑走下山する。計画ではもう少しゲレンデを楽しみたかったが、今回は両日穏やかに晴れますように！

(補足 この行事は2023年度3月16～17日に実施されたのですが、2023年度の支部報には掲載できませんでしたので、本号の掲載となりました。 編集担当)

月山春スキー

会員番号 15137 野堀嘉裕

今年の月山春スキーは2024年4月20日（土）に行われました。この月山春スキーは新年度に入って最初の山行です。月山スキー場のオープン、つまりリフトが営業運行されるのは4月2週目の金曜日ごろですが、積雪状況や天候によってリフトの運行がままなりません。2022年度は好天で姥沢駐車場集合の後、リフトで上の駅へ、牛首下まで滑走、牛首までシール登行、姥が岳山頂北側を迂回して石跳沢源頭へ、石跳沢左岸を滑走して自然博物館まで下山のコースを辿ることができました。2021年度は荒天や姥沢駐車場までの道路が雪壁崩落で通行止めになるなどいくつかのハプニングが重なり中止となりました。今年度も強風が吹いており天候も不安定でリフトの運行状況が怪しい状況でした。石跳沢の積雪が不足との情報もありましたのでリフト乗車を諦め、滑走目的地を姥沢駐車場から下の夏道沿いとすることにしました。



滑走コースの3次元鳥瞰図

20日は朝9時に志津野営場駐車場に集合後、町営バスで姥沢駐車場へ移動。

強風の雲天で見通しは50m程でした。粕谷氏の先導のもとシールを付けずに滑走開始。野堀、鈴木支部長が続き沼部ご夫妻がスノーシューを務めました。途中暖かいお茶休憩をとりながら灌木の間を抜けて進みます。10時過ぎに一本ブナの根元で休憩するころには天候も回復し、展望が得られるようになってきました。11時過ぎに志津野営場駐車場北の遊歩道に架かる橋を越えましたが、橋の上には積雪が50cm程しかありませんでした。石跳沢に向かっていたらさぞ怖かったことでしょう



志津野営場前バス停



一本ブナの前で

環境研修登山（庄内海岸アルプス）

会員番号 12340 佐藤映子

期日 令和6年5月18日（土）
参加者 河口昭俊（リーダー）、野堀嘉裕、粕谷俊矩、粕谷純子、鈴木理夫
日向稔也、佐藤映子（敬称略）
コース 加茂坂峠～地蔵堂～荒倉山～荒倉神社～鞍乗峠～展望台～由良海岸

爽やかな5月。晴天。高館山の麓の自然学習交流館「ほとりあ」駐車場に集合。旧加茂坂トンネルの手前から山に入る。道標も道型もしっかりと整備されている。大山公園や草井谷、油戸から何度か入山しているが、私はこの加茂坂峠のコースが好きだ。

加茂地区に建設が予定されていた発電用風車建設。昨年、多くの市民の反対運動によって中止に追い込むことができた。そこで庄内海岸アルプスの豊かさを改めて確認しようというのが今回の環境研修登山の趣旨である。

加茂坂峠からの尾根歩きは快適。地蔵堂で野堀先生からスマホで花の名前を調べる簡単な方法についてレクチャーを受ける。そこら中に生えているツタウルシも調べられるようになった。そこから急坂を荒倉山へ。山頂で春の暖かな日差しを浴びながらのんびりと昼食を摂る。その後、野堀先生から今回中止になった風車建設の概要について説明していただいた。

山頂からブナ林を下って荒倉神社。ここから「里山歩きコース」に入り、海をみながら進み、横光利一の『夜の靴』に出てくる鞍乗峠を通る。

しばらく山中を行くと交流館ホットハウスの小屋。その上が展望台で日本海が一望できる。海が見えると心が広がる。ゆっくりと展望を楽しんだ後は日本海に向けて下る。何年か前の支部登山のとき、このあたりから足を踏み出すのが躊躇われるほどのカタクリの群生が続き、これが「スプリングエフェメラル」だと幸せに満たされたことを思い出す。最後は刈り払いがされていなくてひざ上の草漕ぎになったが、藪と違って草は柔らかく気持ちよかった。到着した由良の海岸は午後の光にきらきらと煌めいて、2月に亡くなった母がいる「彼岸」もこんなに穏やかに煌めいているところかもしれないと安堵した。

この素敵な縦走路を人知れず地道に根気強く整備してくださった元会員の松田孝一さん、そして梅本幸巳さん、NPO おうらの里おおやま再生プロジェクトの皆さん、地元の自治会の皆さんに心から感謝も申し上げます。おかげさまで四季折々山歩きを楽しむことができます。



標識「加茂古道入口」



荒倉神社



荒倉山山頂

山小舎探訪・万助小舎

会員番号 16462 日向稔也

期 日 2024 年 6 月 22 日（土）～23 日（日）

参加者 鈴木理夫、瀬川昭、野堀嘉裕、武田幹男、沼部貞治、沼部ひろみ、
安井康夫、田邊信行、日向稔也 （9 名）

今年度からの新企画の山小舎探訪。
最初に選んだのが鳥海山の万助小舎。
標高約 1000m の万助平に建てられた 2
階建ての山小屋で正式な名前は酒田市
営山小舎。酒田市が管理し予算措置を
行っている。実際の管理は地区の高校
山岳部顧問の OB が設備の修理を行い、
地区の高校の山岳部が石炭の荷揚げを
行うなど大切に守られてきた。築 60 年以上経過し、老朽化が進
んでいるものの、補強工事によって今でも快適に過ごせる山小屋
である。



出発前

6 月 22 日（土）、快晴。一ノ滝駐車場（標高 460m）に集合し、
行動開始。食料やアルコールで普段以上に重い。ゆっくりペース
で小屋をめざす。苔沢、渡戸の水場で休憩。汗をぬぐい、冷たい
沢水にホッとする。渡戸から先は登りが少しずつ急になる。



「渡戸」の標識

尾根渡りからその名の通り尾根道になり、所々痩せ尾根を進む
ことになる。順調に高度を稼いだのであるが、午後 5 時ころ、高度 900m を過ぎたところ
で、安井さんがバランスを崩し左側の急斜面を転落してしまった。大声で呼びかけ
ると、少し間をおいて応答があった。状況を確認すると、20m 位落下し、木の枝に引
っかかって止まっている。動けるとのこと。一同ホッとするも、どうやって引き上げ
るか。降りていこうにも足場がなく途中までしか降りることができない。とりあえず
ザックはテープとロープを結んで投げ下ろし、引き上げた。その後、登り方向にブッ
シュを握って進めば道に戻れるかもとのこと。やっと無事を確認したのは 30 分くら
いたったところか。緊張がほぐれた。

これからの行動を検討した。表立った怪我はない。胸に痛みがあるものの歩けると
のこと。様々なケースを考えたが、小屋を目指すことにする。通常であれば 1 ピッチ
で着けるし、下ろうにも時間がかかりすぎる。安井さんの荷物を分担し行動再開。ゆ
っくり進む。途中で安井さんのザックをデポし、鈴木さんが小屋を往復して運んでく
れた。ようやく小屋に到着したのは 6 時半ころ。あたりは薄暗くなっていた。

この小屋は、高校の山岳部がよく利用する小屋で、掃除は徹底されている。無人の

避難小屋としては他にないくらい整理整頓されている。今回も相変わらずであった。

早速、持ち寄ったもので夕食（宴会）を囲む。安井さんも少し痛みは残っているといいながらも、宴に加わってくれた。

どうしても話題は転落のことに向かってしまうが、その中で、装備のことが話題になる。今回参加者9人のうち、ロープを持参していたのが2人。これでは不安である。年齢が上がるにつれて、どうしても軽量化に走りがちであり、緊急事態への装備は後回しにしてしまうのが実情だ。医療品、ツェルト、細引き、非常食、ピンチ缶（針金、ペンチ、ガムテープ、ビニールテープ、予備の靴紐、電池、アルミの保温シート等々）は省いてはならない。

登山保険もそうだ。

翌日、朝食後、部屋の後片付けをして下山。足元に注意してゆっくり下った。駐車場で解散し、全員無事に帰宅することができた。

今回は大きな教訓を得た山行であった。翌日、細引きを新たに購入し、登山保険に加入することも決めた。



小舎の内部



小舎の全景

第37回東北・北海道地区集会

福島支部主催 裏磐梯

会員番号 11637 鈴木理夫

2024年7月12日（金）～13日（土） 1泊2日

参加者 鈴木理夫、野堀嘉裕、武田幹男、沼部貞治・ひろみ（5名）

今年の「東北・北海道地区集会」は、福島支部主催により裏磐梯で開催された。2022年夏の山形県南部の集中豪雨被害のため、現在もJR米坂線のバス代替輸送や一部道路でも片側交互通行が続いている。豪雨の当日指導している高校山岳部の合宿で尾瀬に行く予定で（結局中止）、この地域の降雨や道路状況の情報を注視していたことを思い出しながら白布峠を超え、会場のグランデコホテルに向かった。（7月末に今度は県北部で深刻な豪雨被害が生じるとは知る由もなかった。）グランデコは以前東急が経営していた大型リゾートホテルである。支部長会議に出席。私は支部長になって4年目なので、顔見知りも増えたことを実感する。

式典と星賢孝氏による講演「世界を魅了する、奥会津・只見線」を、少し離れたマウンテンセンター2階で行った。なお、星氏の撮影による只見線のカレンダーを頂戴した。懇親会では支部の紹介のため、「学校から見える山」で作成した月山・朝日・葉山の拡大展望図・鳥海山の鳥瞰図を持参し、山形支部の活動をアピールすることができた。若干ながら頒布活動も行い、参加者からも好評で、多くの会員と交流を深めた。

翌日の登山で山形支部会員は全員「猫魔ヶ岳登山班」である。天気はますますで、土曜日のため八方台の駐車場は、磐梯山に登る一般登山者も多く込み合っている。大人数での登山なので、運営する福島支部も大変そうである。猫魔ヶ岳を経て猫石で雄国沼湿原を眺めながら昼食を取り駐車場にもどった。

※後日談 コーチをしている高校山岳部が昨年吾妻で夏山合宿を実施したが、その際グランデコの奥からスタートするデコ平からの往復ルートを選んだ。私も途中までは初めて登るルートで、西大巔に戻る際は雷が轟き、ぐしょぐしょになりながらの下山となったが、この地区集会への参加が登山計画を考える参考となったのは幸いであった。



それぞれの白馬

会員番号 11637 鈴木理夫

2024年7月29日（月）～31日（水） 2泊3日

鈴木理夫、瀬川 昭、武田幹男、河口昭俊、日向稔也、沼部貞治、沼部ひろみ
加藤美智、安井康夫

私には行ってみたい場所があった。私が大学時代に入っていたクラブが所有している通称山小舎と呼んでいた立教山荘である。卒業後に北アルプスなどの行き返りにたまに宿泊したりはしていたのだが、たぶんこの20年程は訪れる機会がないまま時間が過ぎ去ってしまっていた。建築後の経年による劣化、コロナの影響により長らく続いたクラブも部員が途絶え、大学生の現役部員による利用が見込めない等の問題を抱え、OB会で取り壊す方針が出されに至った。無くなってしまう前に是非行ってみたいと思い、支部行事に組み入れて訪れてみることにした。所在地は長野県北安曇郡小谷村白馬乗鞍高原わらび平で、白馬乗鞍温泉スキー場とコルチナススキー場の間に位置し、グレンデの端から約20メートルの至



安井さんによるスケッチ

近距離に位置している。梅池まで車で10分程度と便利な場所にあり、白馬岳や唐松岳などの後立山連峰の登山、日本百名山の一つである雨飾山にも近い恵まれたロケーションにある。支部行事の「それぞれの上高地」にならい、ここをベースにそれぞれ行きたいところに出掛けることを前提に、この行事を「それぞれの白馬」とネーミングしてみた。

当然ながら白馬大雪渓からの白馬岳登山の計画を考える参加者もいたが、雪不足のため雪渓の崩落や落石により大雪渓ルートが閉鎖される予想外の状況になってしまった。唐松岳方面、白馬乗鞍岳方面等の登山を計画し準備していたが、更に思いがけないことが生じてしまった。出発直前の25日から線状降水帯の発生による記録的な豪雨により、山形県北部は浸水や土砂崩れなど大きな被害を生じた。現時点で片側交互通行を余儀なくされている戸沢村の国道47号、酒田側で多数の崩壊箇所を抱えた青沢越えなど惨憺たる状況となってしまった。「それぞれの白馬」を中止すべきかを迷いながらも結局実施することとした。気候変動は深刻で、今までの常識が通用しない。梅雨明け直後は天候が安定し、夏

山登山に最適な時期になる筈だった。しかし、行きと帰りの日は天気良かったのだが、登山を実施した中日はずぶ濡れになるような雨となり、唐松組は八方池付近で引き返し、白馬乗鞍組は拇池自然園に変更し、這う這うの体で立教山荘に引き返すことになった。こんな状況の中でありながら、「それぞれの白馬」が不評かというよりもむしろ好評だったと言える。近くの若栗温泉の快適さ、山荘にて自分たちで料理した食事の美味しさ、昭和レトロな山小舎の空間は余り若いとはいえない我々には非常にマッチするものであった。こう思っているのは私だけじゃない筈だ。私にとっては「また、行ってみようか。」と思える山小舎である。

宮城・山形支部交流会

会員番号 16798 沼部 ひろみ

今年度は2024年9月15日(日)・16日(月 敬老の日) 山形支部が担当で遊佐町の湯楽里を会場に開催されました。

参加者：宮城支部は仙石支部長含め6名、山形支部は鈴木支部長・河口事務局長・野堀顧問・沼部貞治・沼部ひろみ・安井康夫(会友)・佐藤映子(神社散策参加)・小野寺喜一郎(交流会参加)池田正通(交流会参加)計9名

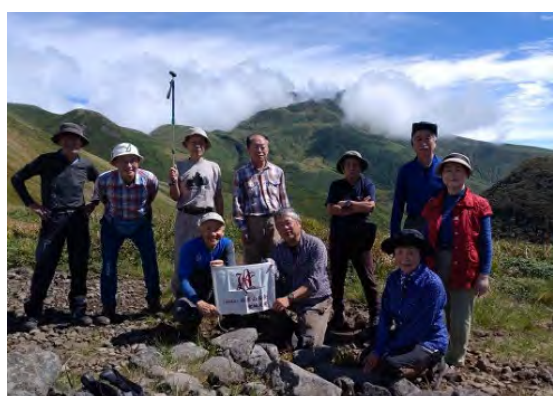
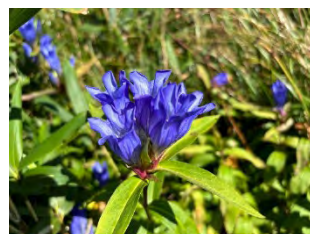
9/15(日) 午後集合・受付をし、吹浦古道の出発地の大物忌神社散策、湯楽里に戻り鈴木支部長から「鳥海山に関する幾つかの話」の講演を聞く。噴火を繰り返し畏怖された鳥海山の形の成立ち、山岳信仰の歴史、人々との関わりや文学など、広範囲に渡り大変興味深い内容でした。

夕食と共に交流会が始まり、ここから小野寺さんと池田さんが参加され、小野寺さんから7/25の大雨で甚大な被害を受けた庄内地区の状況報告があり、まだまだ復旧のスピードがもどかしく被害の大きさが感じられる報告でした。

酔いが進むと皆さん舌好調!! 楽しい宴は続くのでありました。

9/16(月)祝日 快晴!前日の土砂降りは嘘のように晴れました。

朝食後、大平登山口から笙ヶ岳の予定で登山を開始。宮城支部6名、山形支部5名。登りながら何回も振り返ると穏やかな日本海が眼下に見え、内陸に住む私には非日常の景色で飽きることなく見惚れました。そして鳥海山の威風堂々とした姿が見え大満足!帰りの時間の関係もあり、分岐で昼食を取り、折り返しの下山となりました。長かった夏もそろそろ終盤、青紫のリンドウやハクサンイチゲが花盛りでした



それぞれの上高地

会員番号 15137 野堀嘉裕

2024 年の「それぞれの上高地」は 10 月 2～4 日に 2 組で山行を楽しみました。初日は 8:30 に鶴岡市小真木原運動公園第 2 駐車場で全員集合、10 人乗りレンタカーに 6 人乗車で出発です。皆で運転を交代しながら日東道⇔北陸道⇔国道 158 経由で沢渡へ。第 2 駐車場にレンタカーをデポし、タクシー 2 台に分乗して上高地に向かいました。

上高地から見た穂高連峰



林の中に佇む山研



10 月 3 日西穂独標グループは 6 時に山研出発。メンバーは武田 CL・鹿野(ゲスト)・黒木(ゲスト)です。平湯温泉から新穂高ロープウェイ経由で西穂独標を目指しました。西穂山荘では穂高連峰の大展望を楽しみましたが、天候悪化のため西穂丸山(2452m)まで登った後、上高地に下山することとなりました。

西穂丸山から独標を望む



岳沢小屋正面

岳沢小屋往復グループは 8 時に山研出発。メンバーは安井 CL・鈴木・河口・野堀です。梓川河畔の岳沢口から風穴経由でジャンダルムを正面に見ながら登行します。岳沢小屋で昼食後には小雨が降り出したので急いで下山しました。

午後 5 時には両グループメンバーが無事に山研に戻りました。その後はテーブルを囲んで一杯やりながらそれぞれの山行の経過についての報告会となりました。両グループの移動経路や写真等は Yamap を参照してください。今回は文字通り「それぞれの上高地」となりました。山研の山田さんに感謝です。

令和6年度支部晩餐会

会員番号 17125 丹野浩之

期日 11月2日(土)・3日(日)

参加者 木村喜代志、粕谷俊矩、後藤彰、鈴木理夫、小野寺喜一郎、野堀嘉裕、
武田幹男、日向稔也、沼部貞治、沼部ひろみ、結城敏宏、小林政志、丹野浩之
(13名)

村山市の湯舟沢温泉にて山形支部晩餐会が開催され、参加させていただきました。
初日は生憎の雨模様の中、各各乗用車にて温泉に集まってきます。私も久々のイベント
参加で、ご無沙汰している皆さまとお会いするのを楽しみにしておりました。部屋につ
くと皆さん変わらずお元気にお過ごしのように終始明るい話し声と笑い声に包まれて
いました。まずはひとつ風呂。泉質は申し分なし、狭めの浴槽ながら日帰り利用の方が
いらっしゃるのも納得です。

夕方から晩餐会の始まり！
鈴木支部長さんのご挨拶の
後、宴は進んでいきます。美
味しい料理あり、差し入れの
お酒あり、とにかく色んな話
をさせて頂き楽しい時間を過
ごすことができました。恒例
のオークションも大盛況だったのは言うまでもありません。



2日目、少々飲みすぎた感のある朝を迎え、尾花沢市の玉野地区にあるニッ森山へ。
ニッ森山は、北峰(742.2m)と南峰(695m)からなる双耳峰。通称北峰は男山(おどごや
ま)、南峰は女山(おなごやま)といわれており、西には尾花沢盆地の田園風景と葉山や
月山が一望できます(尾花沢市HPより抜粋)。登山
口にある駐車場が狭いとの事で徳良湖にて乗り合
いに変更し現地へ。R347沿いの母袋集落を抜け、
ニッ森入口看板から左折、展望台を通り、牧場入口
をスルーし車止めまで進みます。ここには7～8台
駐車可能なスペースが有り、車を降りて各自準備を
して、記念撮影。いよいよ登山開始です。



前日の雨で足元悪いかと不安でしたが、比較的歩
きやすい。少し進むとのぼり滝の看板出現しちょっ
と気になったがスルーして先へ進む。むすこ森を左
に見ながら天狗のすもう場に到着、備え付けの鐘を
鳴らして南峰へ。ほぼ直登ルートなので、傾斜はま
あまあり、下が土なので意外と滑ります。程なく
山頂につき、良い眺めを堪能しながら軽く食事を取り下山となりました。天気の良い日
にもう一度登ってみたいと思う良い山でした。



2025 蔵王樹氷原を滑る会

会員番号 15525 河口昭俊

今年の樹氷原を滑る会は、近年の暖冬・雪不足の心配は全くなく、十分な積雪の蔵王温泉スキー場で、計画どおり1月16日（木）～18日（土）に行われました。

初日は各自蔵王到着後、思いおもいのゲレンデで滑降。例年どおり前日に東京を出発して運転してきた安井会員たちは初日から元気に滑っています。午後には三々五々宿舎のヴァルトベルクに到着。受付を済ませるとまもなく部屋での練習呑み会が始まりました。初日は会員会友14名の参加で、結城会員、山田会員、ゲストの神奈川支部杉田会員は初参加でした。

翌日は朝からスキーです。粕谷会員が加わり15名を2班に分け、少々大所帯ですが同じ行動をとることにしました。さてどのゲレンデからスタートするか。大森ゲレンデまで宿舎のバスで送ってもらうという話もありましたが、結局は蔵王ロープウェイに乗ることにしました。これが大誤算。山麓駅に到着したときは、「いつもより人が多い」くらいの感じでしたが、まずは乗車のため皆で並びました。これがなかなか進まないのです。列の横からは樹氷見学らしいインバウンド外国人がどんどん進んでいきます。結局1時間ほども並んで待ち、ようやく乗車できました。

樹氷高原駅に到着すると、山頂線はガラガラ。とりあえず上に行きましょうということで、スムーズに地蔵山頂駅に到着。さて、ようやく滑られると外に出たところ、かなりの吹雪。気温も低く、ザング坂コースに入る前には吹き溜まりとなった雪の壁がありました。皆黙々と壁を乗り越え、前の人を見失わないように、狭く急なコースをゆっくりゆっくり滑り、無事にパラダイスのリフトまでたどり着きました。

ここまでずいぶん時間をとりましたが、その後は順調。樹氷原コースから黒姫ゲレンデを滑降。レストハウスで昼食。ずいぶん値段が高くなったと感じながら2000円近くしたカレーセットを食べました。午後からはリフトで登り返し、連絡コースから大平コースを下り、中森ゲレンデで全体行動は終了。1泊で帰る3人と別れ、その後は各自での行動としました。私は安井さんたちと共に中央ロープウェイで上り中央ゲレンデから高鳥コースを滑り、今年も蔵王スキー場の大半を滑ることができました。

2日目の夕食は豪勢なすき焼き。部屋での二次会では神奈川支部杉田さんの山形支部会友入会の声もあがり、楽しい夜を過ごしました。3日目朝食後に解散式。遠くから来てくれた安井さん一行は3日目もしっかりと滑り、無事に帰宅したようです。スマホ紛失一件などもありましたが、今年の蔵王は素晴らしい雪質で、少し上手になったような錯覚をまた感じさせてくれました。



＜参加者＞ 木村喜代志、粕谷俊矩、鈴木理夫、野堀嘉裕、河口昭俊、武田幹男、沼部貞治、沼部ひろみ、結城敏宏、小林政志、安井康夫、山田和人、酒井眞澄、菅田紘八朗、杉田和美（ゲスト）

2024年度「学校から見える山」活動報告

会員番号 11637 鈴木理夫

贈呈式講話

会員番号 7734 木村喜代志

今年度の「学校から見える山」プロジェクトでは、北星印刷様の20万円のご支援及び本部から特別事業助成金の10万円と「山の日委員会」から5万円をいただき、幸いにも吾妻～蔵王の展望図を印刷し贈呈活動を予定通り実行することができた。ご支援・ご協力頂いた皆様に改めて感謝申し上げたい。

【2024年度 活動報告】

- ① 2024年4月26日（金） 山形銀行酒田支店
贈呈式 北星印刷代表取締役 岩間 奏子 様より
参加者 鈴木理夫 河口昭俊
- ② 2024年7月1日（月）10:00～ 粕谷さんご自宅
学校から見える山プロジェクト 担当者会議
粕谷・野堀・鈴木・河口・沼部
小学校への贈呈 見積もり依頼 今後の見通し
- ③ 2024年10月12日（土）午前9時半～10時 寒河江市体育館会議室
学校から見える山プロジェクト 担当者会議
納品された展望図確認 贈呈先・今後の進め方確認
- ④ 2024年10月13日（日）午後2時半 天元台
高体連登山部生徒・顧問への贈呈
1・2年生部員へ110部 顧問へ30部 合計140部贈呈
- ⑤ 2024年12月27日（金）～2025年2月18日（火） 最上川美術館
木山由紀子・広倉柏 二人展「山容を溶く」 展示に協力
12月28日 最上川美術館へ展望図持参 河口
- ⑥ 2025年1月16日（木） 南陽市教育委員会訪問
鈴木・野堀 学校教育課担当佐藤指導主事と打合せ 管理課に展望図贈呈（300部）
梨郷小学校 全校生徒・職員に配布 沖郷・宮内・漆山小の5・6年生に配布
- ⑦ 2025年2月10日（月）秋葉山位置訂正文印刷受取 鈴木
- ⑧ 2025年2月21日（金）南陽市龍樹山に近い四つの小学校への贈呈式
沖郷小 11時30分～ 128部贈呈、 宮内小 12時30分～ 56部贈呈
梨郷小 13時20分～ 110部贈呈、 漆山小 14時40分～ 28部贈呈
木村・鈴木・河口 南陽市教育委員会 学校教育課佐藤由紀子指導主事
梨郷小学校では全校生徒・職員の前で贈呈式を行い、支部長挨拶と木村顧問のお話を
実施（山形新聞・毎日新聞・NCV（米沢ケーブルテレビ）による取材）

【2025年度 活動予定】

- ① 必要経費の確保策の検討
- ② 次回の「鳥海山～出羽丘陵の展望図」 原画作成準備 校正
- ③ 「学校から見える山」展示活動 現在まで作成した展望図・鳥瞰図の展示を実施

【贈呈式での木村顧問の講話】

2025年2月22日 南陽市立梨郷小学校 1～6年生児童43名

講話のタイトル 「奥羽山脈」について（以下は講話の内容を、木村顧問がまとめたものです）

「皆さん、こんにちは！」に元気な声の「こんにちは！」が返ってきた。「今日、皆と話しできることを楽しみにして来ました。大きな声で話合しましょう！それでは、『奥羽山脈』について話をします」。「これから絵を描くので、何を書いているのか解ったら、答えて下さい」といって、ホワイトボードに黒ペンで山形県の絵を描き始めたら、直ぐに「山形県」の声が飛んできた。書き終わってから、「山形県の山形は、山の形と書くが、山の形をしていますか？」、「していない」の答え。「山の形をしていないのに何故山形県と言うのだろうか？この答えは後ほど説明します」。「山形県は何の形をしている？」、「人の顔」と返ってきた。「この人にヤマガタ ケンと名前を付けましょう」に児童からは笑い声が飛んできた。「ここからの話は、私が考えた物語です」と断り、「ヤマガタ ケン君は、将来王様になる人なので、王冠、冠を被っています」と言って、鳥海山の位置に王冠を、次に、「美しい目をしている少年」と言って酒田の所に目を書いた。「ケン君はいつも一人ぼっちで淋しいので、涙を流していました」と言って、最上川を青ペンで記入した。

ここからは本当の話と断って、「青で書いた涙は、山形県を流れる大きな川です。川の名前は？」に、即「最上川」の声が返ってきた。「ここは南陽市の梨郷だが、大きな町を『市』と呼んでいます。目のあるところは何んという市ですか？大きな港がある市です」の問いに、児童からははっきりとした声が上がらなかった。「ここは最上川が海に流れ込む酒田市です」と言ったが、目立った反応は無かった。王冠を指して、「ここは夏でも雪がきえない高い山です」に「鳥海山」の声が飛んできた。

贈呈するイラストを広げて、「右端の大きな山が吾妻山で、天元台のスキー場もみえます。ここからずーと左に山々が続き、左端が地蔵山や熊野岳のある蔵王山です」と言ってから、ボードの山形県の地図に吾妻から蔵王までの山並みを県境に沿って赤ペンで太く染めた。「このように山が繋がっているのを『山脈』と言います」と言ってから、「蔵王山から北に山寺、船形山（御所山）、神室山と山々が繋がり、更に秋田と岩手の県境となって青森県の海（陸奥

湾)まで達しています。南は吾妻山から福島県の真ん中を横切り栃木県まで繋がっています。これが『奥羽山脈』で、全長 500 kmもある、日本で最も長い山脈です」。

「ところで、500 kmは、どれ位の長さだろう？」に児童は当然把握できなかった。「山形県の南北は約 100 kmあります。ここから東京までがおおよそ 500 kmあります」。「5, 6 年生は、1 時間歩くと大体 4km になります」。「会社勤めのお母さん、お父さんは 1 日なん時間働いていますか？」の問いに 8 時間というはっきりした声が聞こえなかった。「1 時間で 4km 歩くので、8 時間歩くと、 4×8 で 32km になるが、休み時間も必要なので 30km とします」、「500 km を 1 日で歩ける 30 km で割ると、16.66 となるので、ここから東京まで歩くと 17 日かかる計算になります」。この辺は、話が少し早過ぎたこともあり、児童の反応はほとんどなかった。

「山形県には、奥羽山脈の他にもたくさんの山々があります。これらも記入してみます」。

「山形県の北側、秋田県との県境は、鳥海山から東に丁岳山地、神室山地と続き奥羽山脈と合流します」。「南は吾妻山から福島県と新潟の県境に沿って飯豊山地、朝日山地と西に伸び海まで繋がっています」。「更に、鳥海山の東側から、南に出羽丘陵が月山に向かって伸び、朝日山地に繋がっています。このように山形県は、山また山の県です」。「山形県の山形は、むかし『山方』と書いていました。すなわち山の方、山寄り、山に沿ったことを意味しています」。

山形県の図に米沢、山形、新庄市を記入し、「米沢から山形を通って新庄に向かう道路と鉄道があります。新庄から酒田に向かっても道路と鉄道があります。赤湯を過ぎるとトンネルが出てきます。ということは山があるということです」。米沢盆地と山形盆地を分ける山地を記入。「山形から新庄に向かうと、村山市を過ぎ尾花沢市に近づくとやはりトンネルがあります。ということはここにも山があるということです」。山形盆地と新庄盆地（正確には尾花沢盆地）を分ける山地を記入。「新庄から酒田に向かうと出羽丘陵を越えるのでやはりトンネルが出てきます」。「道路と鉄道は山地をトンネルで越えているのが解ります。ここで何か変だぞ、おかしいぞということに気が付きませんか？」。流石にこれに対しての反応なし。「最上川にトンネルはありません。最上川はどのようにして山越えしているのだろうか？水は上に向かっては流れません」。多くはないが、そう言えば……と児童が疑問を持ったようで少しざわついた。「これが解ると奥羽山脈がどのようにして出来たのかが解ります。今日、説明する時間がないので、宿題とします」。「えー?!」の大きな声、日頃の宿題への反応と同じものかなと思えた。「宿題の締め切りは 10 年、あるいは 15 年後、皆が高校を卒業する頃とします」。

児童にとって、10 年、15 年先は考えられないのか目立った反応はなかった。「ヒントは、最上川は周りの山々ができる前から平らなところを流れていたんです。答えが解った時、今

日の話を思い出してください」。

「今日は、みんなとまたお話をしたいくらい楽しかったです。いろいろ答えてもらってありがとうございます。今日の話はこれで終わります」。



梨郷小学校 贈呈式

① 道智道について（会員については敬称略）

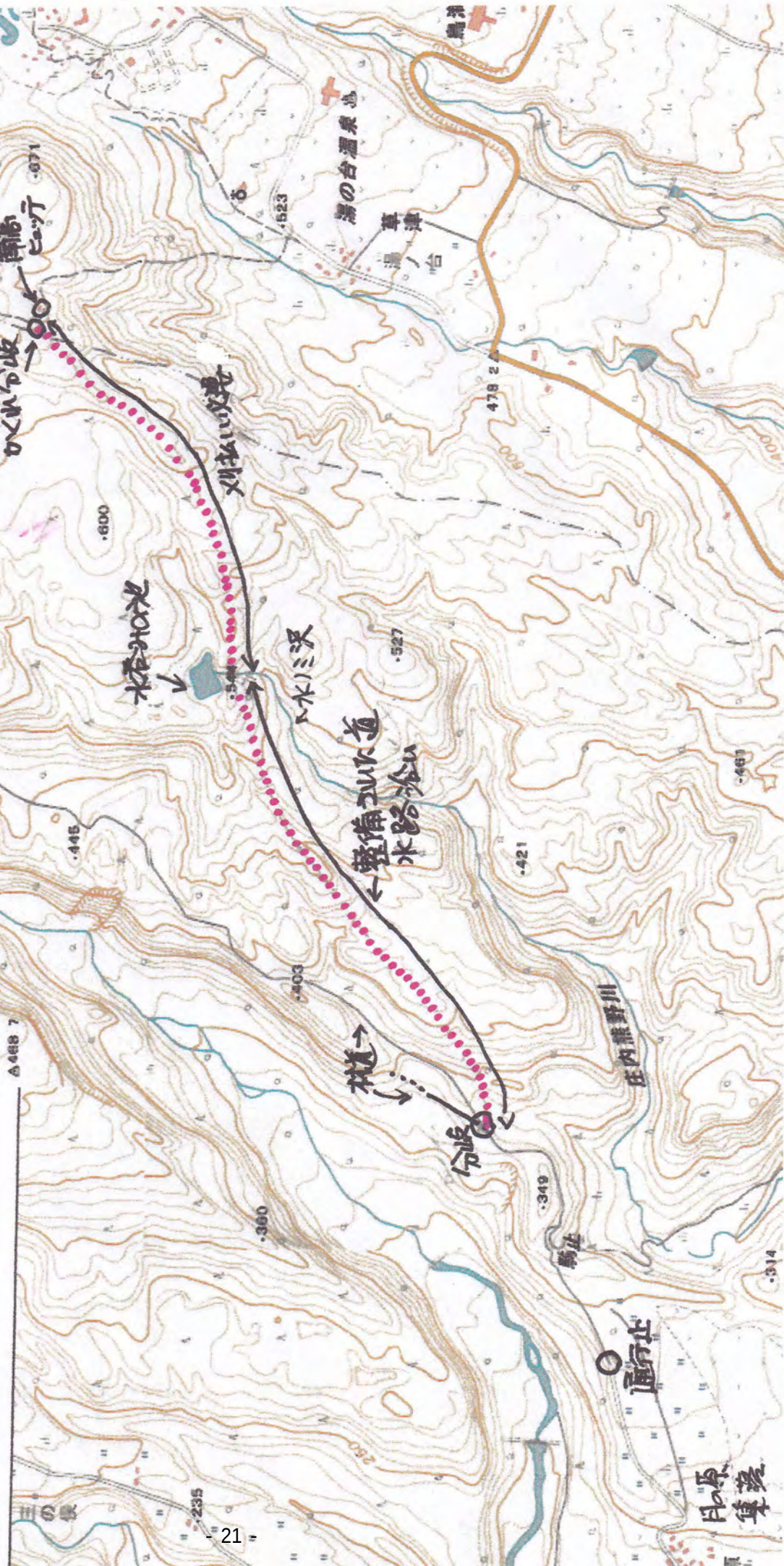
- ・道智道の現状としては、多くは林道や国道になっており、現在山岳古道として歩くことができるのは、白鷹町の黒鴨から朝日町の朝日川第二発電所までの区間だけである（調査済み）。ところが、発電所を管理している県企業局村山電気水道事務所から、高圧電線の下を通ることになるので安全面から、登山ルートとしての公開は控えてほしいとの要請。ルートの公表に際しては慎重に行うことを約す。
- ・要請を受けて、他のルートを検討したところ、朝日川第二発電所の下流の木川ダムのさらに下流域に朝日川にかかるつり橋があり、道智道につながっていることが分かった。このルートを、エスケープルートとして調査することにした。
- ・6月4日（金） 6月5日に予定しているエスケープルートの情報収集のため、山形森林管理署、幸生森林事務所を訪問。周辺の山の（国有林）状況を教えてもらった。
- ・6月5日（土） 野堀、佐藤明、日向の3人で、エスケープルート現地調査。つり橋から南下し、道智道との接続点を目指す。森林事務所が管理のおかげで歩くことはできるが、所々不明な箇所、悪路もあり、道智道との接続点まで到達できず、引き返す。再調査の必要。



② 鳥海古道について

- ・鳥海古道については、本部のマウンテンカルチャークラブが担当することになり、山形支部としても協力することを約束していた。
- ・7月3日（水） 畠中裕之さんと面会。鳥海古道の蕨岡ルートについて教えてもらう。畠中さんは、『史跡鳥海山―国指定史跡鳥海山文化財調査報告書―』（平成26年3月発行）の作成にあたり現地調査に参加し、古道にも詳しい。特に杉沢から横堂までのルートについて教えていただいた。『調査報告書』の記述からも、そのルートが今回の鳥海古道ルートであるとの確信を得ることができた。なお、このルートは25000分の1の地形図「湯の台」には載っていない（地図を参渉）。
- ・7月15日（月） 畠中さんのレクチャーをもとに現地に入るも、登山の入り口を確認できず。杉沢集落の岡野清さん（鳥海山岳会会長）に現地案内をお願いした。登山道の入り口を確認し、「水呑みの池」の手前まで案内していただいた。わかったこと。水呑みの池は現在、杉沢集落の農業用水、生活用水の水源となっていること。登山道入り口から水呑みの池までは水源管理のためしっかりと整備されていること。その先は荒れており刈払いが必要であること。
- ・7月23日（火） 刈払い実施。参加者は河口、日向。水呑みの池から開始。道は思ったほど荒れていないが、笹藪に覆われている。途中まで実施。残りの距離を確認すべく、現在の登山道との合流地点（「かくれ山分岐」）まで様子見。まだ全体の3分の2ほど残している。
- ・8月3日（土） 残りの刈払い実施。参加者は野堀、瀬川、佐藤映子、佐藤一広、日向の5名。「かくれ山分岐」からの下り、前回の刈払い到達点からの登りの二手に分かれて実施、完了。8月に予定されている鳥海古道調査のルートを確保。
- ・8月10日（土）～12日（月） マウンテンカルチャークラブによる鳥海古道調査実施。日向が同行。
 行動概略<1日目> 杉沢集落～横堂～滝ノ小屋（泊）
 <2日目> 滝ノ小屋～薊坂～伏拝岳～大物忌神社～千蛇谷～御浜小屋（泊）
 <3日目> 御浜小屋～大平山荘～（ジャンボタクシー）～吹浦大物忌神社
- ・年度内調査報告書をまとめるべく執筆中。

富中裕之土の公開土出。(07.03)
内野清土の理地集出(07.15)
エビノ作成



追悼 今野秀穂氏（会員番号 8227）

会員番号 9595 粕谷俊矩

入会 1977 年 退会 2024 年 山形支部副支部長 2005 年度～2008 年度

秋田県大曲出身。今野氏の登山の原点は高校 2 年の秋田駒ヶ岳である。高校には山岳部などではなく、気の合った仲間だけでの登山だった。翌年山好きな先生に引率され、燕岳から槍ヶ岳、北穂高岳、奥穂高岳を越え上高地、そして徳本峠を越えている。テントも持たず、毛布一枚で野宿しながらの山行だった。前穂高岳から上高地に下るとき雪渓でバランスを崩し 200m も滑落したが、大怪我もなく無事秋田に戻った。今野氏は、若き日のこの冒険を『山形支部創立 60 周年記念誌』に寄稿している。そして支部行事の出欠ハガキにはいつも美しい書体で近況を寄せていただきました。物静かな方でしたが、内には激しい情熱を秘め、常にハードな課題を己に課していた方でした。晩年は体調不良もあり、支部会員との山行も少なくなりました。ある年の支部晩餐会でのこと、「じつは、ハーモニカ教室に通い始めたもので…」とはにかみながら何曲か演奏していただいたことがありました。単独行を好んだ今野氏にとって、登山は自己との対話であり、透徹したまなざしで岩や木々や星座と向き合い、それを詩的に結晶させるプロセスだったと思います。最後に、先の『記念誌』に寄せられた今野秀穂「山岳逍遙二十句」の中の 3 句を引用し、今野さんの在りし日をしのびたいと思います。



かもしかも 吾も新雪 漕ぎ行けり （蔵王山）

すすき野を わけ消え行けり 独行者 （単独行）

岩稜に 銀河斜めに あふれけり （朝日岳）

追悼 田中洋子さん

会員番号 12340 佐藤映子

1月の役員会で追悼の写真帖の中に満面の笑顔を見たとき、本当に逝ってしまったのだと随分と悲しく寂しく思いました。この7～8年ほどはお会いする機会がなかったのですが、元気でないはずがないと勝手に思い込んでいました。



洋子さんは私の持っていた山女のイメージ「地味 人見知り シャイ 不器用」とは随分とかけ離れた存在でした。元気で 華やかで 賑やかで ユーモアと機知たっぷりの会話。舞踊 着物（着物は季節を切るのよと教えてくれました） 絵画 音楽 スキー 料理 手芸 お洒落 等々。多趣味でマルチに何でも楽しむ笑いの絶えない人でした。圧巻はお家の縁側一面に軒下まで竹竿をならべて育てたアサガオ「天上の蒼（ヘブンリーブルー）」のカーテンです。物怖じせず、小気味の良い「自分ファースト」で、無類の「面白がり屋」さんでした。人に対してもその人の魅力、面白さ、奥行きを引き出す天才でした。今では懐かしい林稔さん、菊池先生、斎藤哲夫さん、長岡（伸）さん、水沢さん、畑中さん、今野秀穂さん、退会（引退）した椎名さん、渡辺誠さん、そして古くからの現会員の皆さん・・・皆で行く山行や晩餐会や東北地区大会などは本当に楽しかった。山岳会に入って生き甲斐を感じましたもの。

包容力のある旦那さんのもと、思うがまま存分に生きた人生だったのではないかしら。

See you over there いつか あの世で

大場貞吉さんを偲んで

会員番号 9173 會田茂雄

大場さんとは同じ高校の山岳部で出会ったのが最初でした。彼が私の 2 学年下です。遙か遠い昔を思い起こすと、週末には近郊の山々に自転車やバスで出かけ、休みが続くと朝日連峰や飯豊連峰で縦走を共にした思い出があります。飯豊連峰では温身平にある発電所の水取小屋に世話になり、石転び沢を通り稜線に向かいました。冬は蔵王でスキーを一緒に楽しんだことも若き日の思い出です。

高校を卒業すると、私は地元の山形山岳会に入会し、山野を歩き回っていましたが、暫くして、大場さんも入会し、また一緒に山行を続けるようになりました。その後、私も日本山岳会に入会しましたが、会員名簿を見てびっくりしたのは、そこに大場さんの名前があり、私よりも若い会員番号だったことです。彼は控えめな気質の持ち主で、多くは語らなかったのですが、高校卒業後間もなく日本山岳会にも入会した様子でした。それ以降互いに二つの山岳会で気心の知れたお付き合いが始まりました。

大場さんの趣味は、溪流釣りや山菜採りなどで、特にキノコに詳しく、判別は完璧でした。採取するにしても必要以上は決して採りませんでした。彼は器用で、山形山岳会の山小屋の水道、ガス管、灯油の配管等々をひとりで担ってくれました。また、丸太を運ぶのに普通は数人がかりのところをひとりで運ぶほどの力持ちでしたが、人には自慢せず黙々と仕事をこなす姿は実に頼もしく感じたものです。

山形支部の行事にも色々と参加しましたが、特に思い出に残るのはヒマラヤトレッキングです。群青色の空からカトマンズ空港の赤黒い滑走路が見えたとき、また来たなと思い出しました。国の木であるシャクナゲは背丈が電信柱位もあり、花の盛りの時期にはピンクの花弁が地面いっぱいに広がり、群青色の空と見事なコントラストをなしていました。その花弁を踏みしめて歩いたことを思い出します。

思い出せばきりがありません。間もなく桜の季節になります。心よりご冥福をお祈りいたします。

2025 年 3 月



(公益社団法人) 日本山岳会青森支部 30 周年記念登山
台湾の玉山 (3,952m) 登山の記録

会員番号 15526 武田幹男



(参加の動機：50 年間のサラリーマン人生の卒業記念として、この登山に参加いたしました)

◆ 計画の概要

① 登山参加者 10 名

名 前	性別	年齢	所属と役割	名 前	性別	年齢	所属と役割
林哲全	男	59	現地ガイド	岩渕 洋美	女	42	青森支部
須々田 秀美	男	70	青森支部リーダー	赤坂 純友	男	39	青森支部
尾崎 史明	男	54	青森支部	武田 幹男	男	73	山形支部
前田 恵三	男	73	青森支部	冨塚 和衛	男	74	宮城支部
萩野 幸江	女	66	青森支部	松元 秀平	男	24	宮城支部

- ② 期間 2024年4月14日(日)から4月19日(金)まで5泊6日
 登山は、4月16日(火)から4月17日(水)
 観光は、4月18日(木)(故宫博物館、革命記念館等)
- ③ 概算費用 飛行機代 88,000 円/人(往復)、仙台から台湾桃園国際空港で約3時間
 ホテル・バス・ガイド・食事・観光等 計 130,000 円/人
 ＊入山料 5000 円は、青森支部より援助いただきました。

④ 登山概要

- ・玉山は、台湾で一番高い山 3,952m。日本統治時代は、新しく見つかった高い山の意味で《新高山ニイタカヤマ》と呼ばれていた。
 (参考：3,000m以上の山が台湾では 268 座、日本では、21 座。4 段階の難易度では、一番登り安い A ランクの山)
- ・位置:台湾のほぼ中央部の玉山山脈に属する。
- ・山小屋の拌雲山荘の申し込みは、抽選(外国人枠 24 床/日)
- ・登山ルートと時間(私の実績です)

16 日 9:45 塔塔加登山口(標高 2,610m、山荘まで 8.5km) ➡13:00 昼食
 ➡16:15 拌雲山荘(山小屋)泊り

17 日 2:30 拌雲山荘(標高 3,400m、山頂まで 2.4km) ➡5:43 玉山 山頂着(標高 3,952m、登山口まで 10.9km) ➡8:04 拌雲山荘 9:05 発 ➡14:13 塔塔加登山口着



◆ 行動の記録

① 4月14日(日)

- ・ 日本時間 6:30 寒河江の自宅出発 ➡ 日本時間 14:00 空港集合 ➡ 台湾時間 16:05 仙台空港発 ➡ 台湾時間 18:55 台湾桃園国際空港着 (台湾との時差 1 時間)

反省点：酸素ボンベ 1 本持参したが、持ち込み不可であった。

バッテリーは、スーツケースに入れては NG で、手荷物持参であった。

- ・ 飛行機で隣席の青森の萩野さんから次のような、おもしろい話を伺いました。
《実際にあった遭難事故の登山を迫体験登山をすることにより、多くの教訓を得ることがある》とのお話を伺い、興味をそそられました。
- ・ ホテルは、台北市の駅近くのビジネスホテルであった。トイレは、紙を流せない注意書きがあり、何故か不明？
- ・ 携帯のラインは、どこでも通じるので便利だった。

② 4月15日(月)

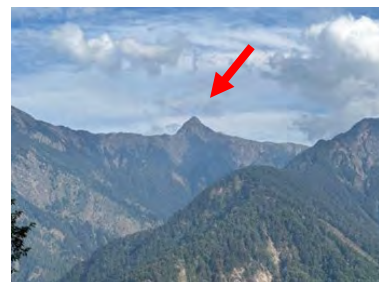
- ・ 移動：9 時ホテル出発 ➡ 15 時ホテル着 (阿里山国立公園内ホテル)
- ・ 阿里山国立公園の中での夕食は、美味しいレストランであったが国立公園内はアルコールが禁止とのこと、とても残念。

反省点：食事がとても美味しかったので、つい食べ過ぎてしまった。

翌日、胃腸薬服用。



- ・ 宿泊したホテルの庭の樹木に面白い木を見つけました。
- ・ 枯れ木の上に新しい樹木が成長しており、屋久島で見た樹木を思い出しました。
- ・ 移動のバスから、玉山主峰を遠方に見る。あの山が、これから登る山か！



③ 4月16日(火)

- ・4:30 起床(天候晴れ 30%、山頂気温 5℃) ➡7:00 食事➡8:00 バス移動。
- ・拝雲登山サービスセンターにて入山手続き(パスポート必要)、ヤママップで玉山をダウンロード。
- ・9:45 塔塔加登山口を出発し、一路山小屋の拝雲山荘へ。気温が高めだが風があり、とても快適で登りやすかった。
- ・事前にサングラスとヘルメットを着用。ヘルメット着用での登山は、初体験。思ったより、軽く気にならない。
反省点:首筋の日焼け防止用ネットを着用しないで登ったので、夕方首がヒリヒリと痛む。
- ・私は、皆さんより体力的に自信がないことを須々田リーダーに報告し、最後尾のグループ3人(須々田、尾崎、武田)で行動した。
(3年前の富士登山の体験時、しつこいほどガイドさんからゆっくりゆっくりと登り、徐々に高度に慣れることの重要性を教わった)
- ・須々田リーダーからのアドバイスで、高山病対策の呼吸方法とそれに伴う歩き方を教えていただいたこと、そして何よりのアドバイスが、《前に追着こうとしないで、自分のペースで登山をするように》と時々声をかけてもらいました。このことが高山病にならずに快適に登山ができたと考えている。
須々田リーダーには、とても感謝(シェーシェー)・感謝(シェーシェー)です。
- ・登山道はとても整備が行き届き、渡り栈橋(約60個)もきちんと美しくかけられており、《ぬかるみや雑草もほとんどなし》の最高レベルの安全で歩き易い登山道であった。
- ・標高3,000m以上の山が多数ある玉山付近は、森林限界も標高約3,800mと高く、墨絵に描かれているような絶壁の岩や大きな樹木が多く、雄大で美しい山並みを十分堪能できた。途中で群生して咲いていたシャクナゲには、とても癒されました。
- ・13:05の昼食は、標高3,025mの休憩所でもいただいた。とても広くきれいに整備されており快適に休憩できました。
仲間にもいただいた梅干しの板状のつまみがとても美味しかったです。シェーシェー！
(私の登山のお気に入り追加されました)
- ・ふと、台湾の山には、熊がいるのかな？と思った。(ツキノワグマに似た熊がいることが下山後がわかった)

渡り栈橋橋



シャクナゲ



休憩所



インスタ映えスポットでのポーズ？



途中の絶景



- ・ 16 : 15 拝雲山荘に到着。（標高 3,402m、登山口から 8.5 k m、23,368 歩）
- ・ 山荘に近づいたら、おいしい匂いがぷんぷん。意味が解らないが、山荘の看板の前で《懺悔のポーズ》をとる様に言われて撮影された。
- ・ 17 : 30 の夕食は、大自然のパノラマを見ながらいただきました。最高！（ドローンで周囲を見れば最高だろうな！）

反省点：手洗いに使う水を飲みながら食事、これはNG。

飲料は、準備された沸かしたお湯を呑むのだそうだ。

山小屋到着



懺悔のポーズ



疲れがとれる足踏み板



隣が若い女性でしたので・・・



絶景を見ながらの夕食



④ 4月17日(水)

- ・1:30 起床⇒2:00 朝食⇒2:30 ヘッドライトとヘルメット着用し、サブザックで出発
- ・3:30 と4:30 に休憩をとって、5:43 山頂到着。とてもきつく、《山形の鳥海山の
新山の険しい岩が延々と続くイメージ》の山で鎖をたよりにやっと登り切った。
(残念ながらご来光には、間に合わなかった)

スタート



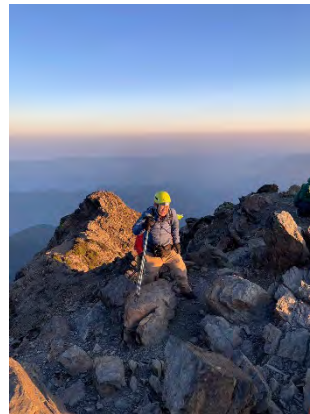
ご来光



山頂直前



山頂直前



同左拡大：パテパテの表情



山頂での写真

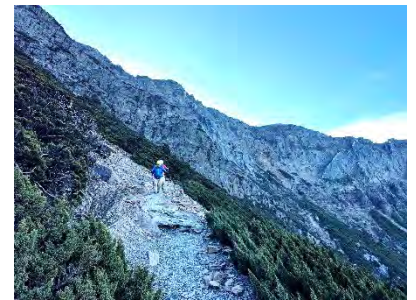


山頂での写真



(右上2人は、同じ登山仲間で婚約中)

- ・ 6 : 10 下山開始 ➡ 8 : 04 拌雲山荘到着して朝食 ➡ 9 : 05 拌雲山荘出発 ➡ 14 : 13 塔塔加登山口に到着。
- ・ 下りが一番けがの確立高いので、鎖をしっかり持って慎重に下山。
- ・ バイオトイレは、無料(協力金不要) で手洗いの水も準備されており、建屋も自然に溶け込んだ茶色で素敵なフォルムをしています。



清潔なバイオマストイレ

台湾が海底から隆起したことを証明する岩壁



下山直後の皆さんの笑顔



⑤ 4月18日(木)

- ・ 8:30 ホテル出発 ➡ 9:15 日本統治時代の新高山登山口を見学 ➡ 故宮博物館を見学 ➡ 革命記念館を見学 ➡ ホテルへ
- ・ 故宮博物館では、すばらしい展示物の価値が、あまり理解できなかった。バスの中でのカラオケは、良かった！尾崎さん、最高！
- ・ 台湾山岳協会の重鎮の張裕龍氏(92歳)を囲んでの会食。
(山岳協会を通じて地震見舞金を寄付、10,000円/人)
- ・ 小籠包と老酒の会食は、最高の本場の味でした。

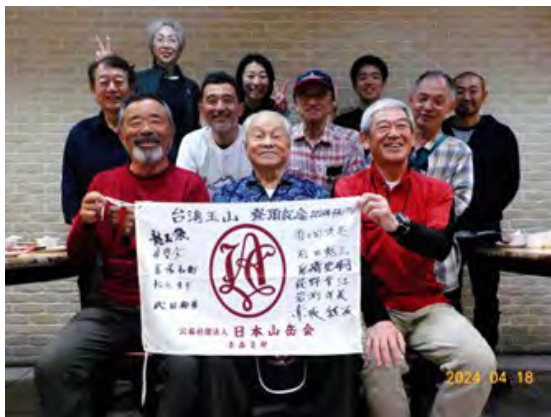
日本統治時代の新高山(玉山)登山口



観光：革命記念館



台湾山岳協会の重鎮の張裕龍氏(92歳)を囲んでの会食



本場の小籠包



参加者の皆さま、大変お世話になりました。お蔭様で人生最高の登山となりました。
青森支部の益々のご発展をお祈りします。

山形支部 初代支部長 後藤会長さん

会員番号 7734 木村喜代志

後藤幹次さま、私たちの間では「会長さん」と呼ばせてもらっています。山形市の中心地で15代、350年続いた山形随一の老舗、「旅館 後藤又兵衛」の館主さんでした。早稲大学山岳部だったことから中央との結びつきが強く、日本山岳会山形支部は、全国33支部*の中でも関西、越後、信濃、富山、北海道などにつぐ全国で9番目、静岡と同期の1950年という早期の設立でした。勿論、山形支部結成の立役者であり、支部設立当初から長年支部長を務められました。



高校の大先輩ということもあり、日本山岳会入会の時は推薦人になっていただきました。その後、山関係はじめ多方面にわたり紙筆では尽くしがたいほどお世話になりました。その一端を紹介させていただきますが、先人の山岳への想いを新たにして会長さんのお人柄を偲んでいただければ幸いです。*2025年現在



◎ 高3年時の遭難事故

在籍した高校山岳部恒例行事に「山開き」と「山閉じ」がありました。この時ばかりは山岳部OBさんが経営される蔵王温泉の旅館に泊まり、数人の山岳部OBさんも加わり、山行を前に心を引き締める行事でした。高校3年11月、「山閉じ」の日の遭難事故です。

中村*1、清水*2と木村の3人で土曜日の授業を休み、新雪に覆われた山越えをして温泉旅館に入ろうとしたが、登山路を見失い騒ぎを起こしてしまいました。ビバーク中の深夜にOBさんたちに救出され、蔵王山中腹のドッコ沼湖畔にあった蔵王山の家収容されました。

翌日、保護者共々6人で校長室に直行したが、何故か会長さんも一緒でした。授業を休み、世間を騒がせ、多くの人々に迷惑をかけてしまったのだから校長からのお叱りは当然です。校長の話にかしこまって耳を傾けている途中、会長さんが「学校を休み、多くの人々に迷惑をかけた至らない連中だが、十分に反省している。今一番必要なことは早く家に帰して、ゆっくり休ませることだ」の声が響きました。あの時は、「有難いがちょっと待ってくれ！」が率直な気持ちでした。たちまち校長の話が終わり、それぞれが自宅に戻ったが、最も厄介な父親からの厳しい注意を覚悟していた。ところが、「今後、気を付けるように！」のたった一言で終わってしまった。翌日、3人が部室で顔を合わせた時、父親からの言葉が3人とも全く同じだったことを知った。

遭難騒ぎも収まりかけた頃、「彼らなりに反省しているから怒らないで欲しい。『今後、気を付けるように！』で充分です」と3人の保護者に会長さんからお願いがあったことを知りました。60数年前のできごとですが、思い出す度に会長さんのお心遣いに目頭が熱くなって

します。

*1 中村禎吉郎（1958 早大山岳部明神岳東陵下又白雪崩で死亡）

*2 清水弥栄治（会員番号 10663）（1994 50 代中半肝硬変で死亡）

◎ 豚カツがビーフステーキに

学生の頃、山関係の届物で 11 時過ぎに会長さん宅、旅館 後藤又兵衛さん*3 に向かいました。この時、娘さん、薫子女史の旦那さん小倉茂暉様とお会いしました。会長さんから「とんかつタイガー」*4 で昼食を食べてこいと言われ 2 人で向かったが、暖簾をくぐった途端、目と鼻の刺激に負けて豚カツがビーフステーキに変わってしまった。「怒られるのは一度だから」と妙な理由を並べて食べてしまった。

*3 山形随一の老舗旅館で山県有朋、渋沢栄一、原敬、森鷗外など多くの著名人、文人が来泊 江戸時代の本陣

*4 山形市七日町 1996 閉店の様子がテレビや新聞で報道されるほどの名店だった

旅館に戻り、事の成り行きを正直に話したら「お前たちのことだから、何時かはこういうこともあるだろうと思っていた」の言葉に、牛肉の美味さを改めて思い出したことがありました。思えば、シャカの手のひらで遊ばされている感じでした。

この年の晩秋、会長さんと蔵王でお会いしました。「是非ラーメンを！」と高校山岳部 OB 有志の山岳会、山形こだま会のこぶしの小屋までご足労願ひ、オイスターオイルを利かせた餡かけラーメンを作りました。美味しい、うまいと食べていただいた時は、少しは肩の荷が降りた感じであったことを思い出します。

会長さんと山でお会いすれば私たちの服装、心がけなどなど全てがお叱りの対象でした。でも、いつも目元には笑みがこぼれていたし、返事はいつも決まって「はい、解りました！」だったことも懐かしい思い出です。

◎ 標準語の話せない連中

高校山岳部の後輩と 3 人で暖冬（1972）と豪雪（1974）の年末年始に大朝日岳に登った。そして、仲間同士でヒマラヤを意識しだしてからは、冬の中央、北、南アルプスそして富士山と行動範囲が広がった。ネパールヒマラヤの一角に的を絞ってあれこれ模索している時、政治的な理由から入域制限が厳しかったパンジャブヒマラヤ、ザスカール地方が晩秋になって開放された。この機を逃す手はなく、急遽目標をパンジャブヒマラヤに変更した。とは言っても、交通不便に加え、「いくつかのルートや 2, 3 の峰を除いてはチャンドラ川上流とザスカールとの間の地域は事実上空白のままである」と、ヒマラヤ研究の第一人者、ケニス・メイスンに言わしめた地域である。集められる資料は戦前の僅かなものと、それらを頼りにつくられた地図だけであった。そんな折、日本山岳会で活躍していた教え子が、アメリカで発行された人工衛星からの写真を基にした地図を見つけてくれた。地図はぎっしりと情報が詰まった宝物に思えた。これで何とかなる！と妙な自信が湧いてきたのを思い出す。

ヒマラヤ行にあたり、身体的に最も不安だったが高度障害だった。富士山を越す高度は未知の領域だった。そんな折、当時日本で唯一 6,000m を疑似体験できる自衛隊の航空医学実験隊が立川市にあることを知り、早速申し込んだ。直ぐに山形地連経由で後藤会長さんのと

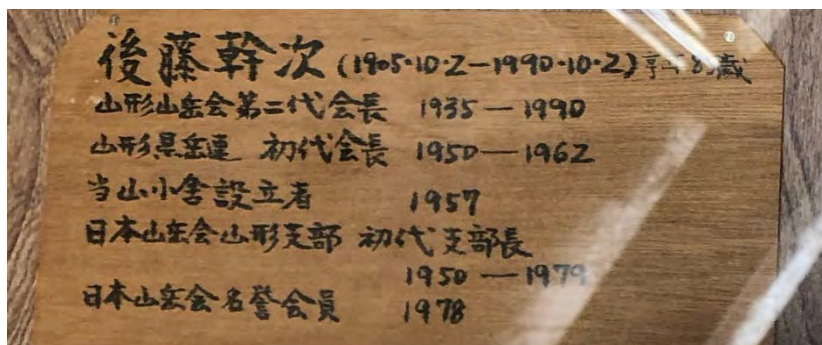
ころに身元調査があったことを後になって知りました。そして、幸い低圧室検査許可を頂くことができました。

低圧検査スタッフの中に天童出身の女性の方が居られ、検査前のミーティングで彼女のつぶやき、「標準語を話される」が聞こえた。何のことが解らないまま高度 4,000mに次いで 6,000mを経験することができました。全てが終わり、検査結果報告を聞いている時、防衛大学校山岳部監督で、以前山形に住まわれていた日本山岳会名誉会員である川上隆氏が現れました。

「お前たちか?!」から始まり、会長さんから電話で「標準語を話せない連中が行くから、何とかしてくれ!」と頼まれたことを知りました。何とかしろという言葉は、余りにも幅広くて困るんだよなあーと笑みを浮かべながら嘆いておられたのが印象的でした。

沢山の方々のお力添えを得て、キシトワールからキシウトワールヒマール東部のウマシ・ラ(5,294m)とインダス川源流近くのペンシ・ラ(4,330m)を越えて、戦後初めての外国人としてザスカルに抜けることができました*5。その陰にも会長さんの暖かい心遣いに支えられての 40 日間に及ぶ長い山旅でした。*5 (コンサイス外国山名辞典・三省堂 1984 発行)

思えば高校で山岳部に入部以来、パンジャブヒマラヤ行と何から何まで会長さんにはお世話になりました。人生に大きな影響を与えくれた偉大な先輩、会長さんには感謝の言葉しかありません。お陰さまでコロナ禍前、80 歳過ぎまでにアルプス、天山、ヒマラヤ、ロッキー、アンデス、パタゴニアとアフリカのナミビア沙漠縦断、サハラそして大地溝帯、さらには南極大陸と足跡を印せたのも高校山岳部が出発点です。会長さんとの出会いがなかったら、今の自分は存在しないことだけは確かです。ただただ感謝あるのみです。



写真はすべて山形山岳会の蔵王の山小屋に掲げてあるものです

日本山岳会山形支部及び会員活動記録

2024（令和6）年4月～2025（令和7）年3月

事務局

2024 年（令和6 年）

4月6日（土）	2024年度日本山岳会山形支部総会（寒河江市文化センター）
4月20日（土）	月山春スキー（姥沢－志津）5名
5月16-19日	熊野古道集中イベント 武田会員参加
5月18日（土）	環境研修登山（庄内海岸アルプス 加茂坂～荒倉山～由良）6名
6月1日（土）	第1回支部役員会（ゆぽか）
6月22-23日（土日）	山小舎探訪（鳥海山万助小舎）9名
7月12-13日（金土）	東北北海道地区集会（福島支部、北塩原グランドコホテル、猫魔ヶ岳）山形支部5名
7月23日（火）	有志：鳥海山蔵岡口草刈 2名
7月29-31日（月-水）	それぞれの白馬（北アルプス後立山 立教山荘泊）9名
8月2日（金）	有志：鳥海山蔵岡口草刈 5名
8月10-12日	本部：鳥海山古道調査 日向会員同行
8月14-18日（水-日）	アルパインフォトビデオ写真展（酒田市総合文化センター）
8月31日-9月1日（土日）	公益清掃登山・芋煮会（蔵王山形山岳会山小屋） 台風接近のため中止
9月15-16日（日月）	宮城支部との交流会（遊佐・遊楽里 鳥海山大平コース）
10月2-4日（水-金）	それぞれの上高地（北アルプス上高地、山研）6名
10月12日（土）	第2回支部役員会（寒河江市体育館）
10月21日（月）	支部事務局会（鶴岡市第三コミセン）
11月2-3日（土日）	支部晩餐会（湯舟沢温泉）13名 記念登山：ニッ森
11月23日（土）	有志企画：佐藤一広会員水墨画展受賞祝賀会（鶴岡市・盛華楼）
12月2日（土）	本部年次晩餐会 木村喜代志会員、小林政志会友、永年会員表彰

2025 年（令和7 年）

1月16-18日（木-土）	樹氷原を滑る会（蔵王温泉スキー場、ヴァルトベルク泊）15名
1月22日（水）	支部会計担当者会議・事務局会（鶴岡市第三コミセン）
2月21日（金）	学校から見える山イラスト贈呈 南陽市立沖郷小、宮内小、梨郷小（贈呈式、木村喜代志会員の講話）、漆山小
2月22日（土）	第3回支部役員会（寒河江市文化センター）
3月15-16日（土日）	天元台を滑る会（天元台高原スキー場、米沢山の会大笠山荘） 天元台高原断水のため中止

支部会員の活動記録・2024 年度

- ・ 武田幹男会員 青森支部創立 30 周年記念登山、中華民国玉山 (3,952m) に参加 (4 月 14 日～4 月 19 日)。4 月 17 日 5 時 43 分登頂
- ・ 野堀嘉裕会員 鶴岡公園環境整備懇談会会長として、鶴岡公園の遺構 (馬出跡) 展示セレモニーのテープカットに参列 (4 月 16 日) (4 月 18 日 荘内日報)
- ・ 本部より連絡 木村喜代志会員 (7734)、小林政志会友 (7915) に永年会員の通知 (5 月 15 日)
- ・ 河口昭俊事務局長と木村喜代志会員 山形千歳山の「新四国八十八ヶ 所」を巡る (6 月 5 日)
- ・ 鈴木理夫支部長 7 月 25 日からの豪雨による県北部の被害を伝える航空写真を提供 (航空・空間情報提供の朝日航洋株式会社より)
- ・ 志田郁夫会員、瀬川昭会員 アルパインフォトクラブ 写真展開催 酒田市文化センター (8 月 14 日～8 月 18 日)
- ・ 木村喜代志会員 荘内日報に連載中の「寄稿文で綴る世界の地誌」の第 208 回 (最終回) が掲載 (第 3 章 8 節 両極地方: 4 月 1 日、第 1 回の掲載は 2019 年 1 月 4 日)

＜付記＞ これらの記事は、会員の皆さんからの情報提供を受け、山形支部としての活動ではなく、会員個人の活動の記録をまとめたものです。掲載の基準は特に設けていませんが、残したいものを選びました。今後とも皆さんからの情報提供よろしくをお願いします。(編集担当)

＜編集後記＞

どうにか支部報の発行に漕ぎ着けることができました。皆さんのご協力のおかげです。この編集にかかわって 4 冊目になりますが、ページ数が少しずつ増えています。今回は、すべての記録について、参加者全員の氏名を書き込んでもらいました。支部報の記録としての役割は大きいと思います

武田さんに玉山の登山記録を寄稿していただきました。その年で (失礼な言い方ですみません) さらなる高みを目指そうというエネルギーに敬意を表します。

白馬岳、初めてのチャレンジを楽しみにしていたのですが、大雪溪にクレパスができ、通行禁止になったのはとても残念でした。温暖化が関係しているのかなと想像してしまいますが、今夏はチャンスがありますように。(編集担当 日向稔也)